

現代日本語
の
語構成論的研究
—語における形と意味—

斎藤倫明

【著】

ひ つ じ 書 房

(著者) 斎藤倫明さいとう りんめい.....

(略歴) 1954年青森県に生まれる。1981年東北大学博士課程中退。
神戸山手女子短期大学専任講師を経て、宮城教育大学教育学部助
教授。

専門は現代語の語彙論。

日 本 語 研 究 叢 書

【第1期第3巻】

現代日本語の 語構成論的研究 —語における形と意味—

発行 1992年3月25日 初版1刷

定価 4841円 (本体4700円)

著者 ©斎藤倫明

発行者 松本 功

装丁者 石原 亮

製版所 株式会社レオプロダクト

印刷所 株式会社萬友社

製本所 有限会社大島製本

発行所 有限会社ひつじ書房

〒344 春日部市増田新田428-76

Tel. 048-736-7767

Fax 048-738-9881

振替東京 2-142852

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などございましたら、
小社からお買上げ書店にておとりかえいたします。
ご意見、ご感想など、小社までお寄せ下さい幸いです。



ISBN4-938669-06-4 C3081

日本語研究叢書



現代日本語 の 語構成論的研究 一語における形と意味

斎藤倫明

【著】



ひつじ書房

C O N T E N T S

目次

現代日本語の語構成論的研究— 語における形と意味 —

序 私の語構成論

9	1. 従来の語構成論
9	1. 1. 方法
10	1. 2. 位置づけ
13	2. 筆者の語構成論—立場・方法

第 1 部 言語単位をめぐって

25	まえがき
27	第 1 章 形態素・単語・語彙素
27	1. はじめに
28	2. 形態素と音素, 単語
28	2. 1. 形態素と音素
30	2. 2. 形態素と単語
31	2. 3. 諸単位間の関係
33	3. 語彙素
33	3. 1. 語彙素の特質とその位置づけ
33	3. 1. 1. 単語の三つのレベル
36	3. 1. 2. 語彙素構成要素
37	3. 1. 3. 語彙の基本的単位としての語彙素
38	3. 2. 語彙素をめぐる問題点

45 第2章 松下文法における言語単位をめぐって

- 45..... 1. はじめに
 46..... 2. 「単～」と「連～」という下位区分
 61..... 3. 「材料」と「結果」というとらえ方
 68..... 4. おわりに

第2部 形容詞語幹をめぐって

79..... まえがき

82 第1章 形容詞語幹を前項とする複合名詞の意味

- 82..... 1. 目的と方法
 84..... 2. 分析対象の設定
 85..... 3. 連体修飾構造への書きかえの基本的な型
 92..... 4. タイプAとBの下位分類
 99..... 5. 意味の多様性のとらえ方

102 第2章 形容詞語幹から派生する動詞の意味

- 102..... 1. はじめに
 104..... 2. 分析対象設定の形態論的基準
 107..... 3. 問題となる各形式の意味
 113..... 4. 山田孝雄のとらえ方と本章の規定の仕方の違いについて
 116..... 5. 「同根形容詞十ナ(ス)ル」からみた同根動詞の分類
 117..... 6. 各グループに属する同根動詞の意味の諸特質
 125..... 7. 同根動詞の分類—意味的観点を取り入れて
 128..... 8. おわりに

133 第3章 形容詞語幹を語基とする派生語の形態と意味—「タカ-(高)」の場合を例として

- 133..... 1. はじめに
 134..... 2. 形態的側面

149	3.	語基タカ-の多義性と派生語の意味との関わり
156	4.	派生語の対立の諸相
160	5.	意味的対立の具体的内容―「音・声」に関する意味を有する派生語の場合
168	6.	まとめと残された問題

第 3 部 複合動詞をめぐって

177	まえがき	
180	第 1 章 複合動詞後項の接辞化―「返す」の場合を対象として―	
180	1.	はじめに
180	1.	1. 本章の目的
181	1.	2. 従来の諸研究との関わり
181	2.	「返す」の単独用法の意味
182	3.	複合動詞後項としての「返す」の意味
185	4.	「返す」と「-返す」の関係
185	4.	1. 直接対応
187	4.	2. 間接対応
187	4.	2. 1. (二) ①の系列について
190	4.	2. 2. (二) ②系列について
190	4.	2. 2. 1. (2) (2)について
191	4.	2. 2. 2. (3)について
192	5.	「-返す」の接辞性について
196	6.	まとめと課題
200	第 2 章 複合動詞前項の音便化―意味との関わりについて	
200	1.	はじめに―問題のありか
202	2.	問題点の解決―形態論的な問題点について
207	3.	問題点の解決―意味上の問題点について
220	4.	音便化の機能について
221	5.	まとめと今後の課題
222	6.	音便形と非音便形の対の具体例一覧

231 第3章 複合動詞「引く+～」の意味の多様性

231	1.	はじめに—本章の趣旨
232	2.	分析の手順
232	2. 1.	分析対象の選定
232	2. 1. 1.	選定の基準
233	2. 1. 2.	分析対象一覧
234	2. 2.	形態論的多様性
234	2. 2. 1.	形態論的枠組
236	2. 2. 2.	形態論的多様性
237	2. 3.	意味の表示
237	2. 3. 1.	意味の確定
239	2. 3. 2.	「接頭辞化」と「強調化」の認定
239	2. 3. 2. 1.	「接頭辞化」の認定
240	2. 3. 2. 2.	「強調化」の認定
241	2. 3. 3.	意味表示
243	3.	結果と考察
243	3. 1.	レベルHにおける考察
243	3. 1. 1.	結果
243	3. 1. 2.	考察の観点
245	3. 1. 3.	考察
247	3. 2.	レベルLにおける考察
248	3. 2. 1.	結果
248	3. 2. 2.	考察
249	4.	おわりに—残された問題

231 第3章 複合動詞「引く+～」の意味の多様性

231	1. はじめに—本章の趣旨
232	2. 分析の手順
232	2. 1. 分析対象の選定
232	2. 1. 1. 選定の基準
233	2. 1. 2. 分析対象一覧
234	2. 2. 形態論的多様性
234	2. 2. 1. 形態論的枠組
236	2. 2. 2. 形態論的多様性
237	2. 3. 意味の表示
237	2. 3. 1. 意味の確定
239	2. 3. 2. 「接頭辞化」と「強調化」の認定
239	2. 3. 2. 1. 「接頭辞化」の認定
240	2. 3. 2. 2. 「強調化」の認定
241	2. 3. 3. 意味表示
243	3. 結果と考察
243	3. 1. レベルHにおける考察
243	3. 1. 1. 結果
243	3. 1. 2. 考察の観点
245	3. 1. 3. 考察
247	3. 2. レベルLにおける考察
248	3. 2. 1. 結果
248	3. 2. 2. 考察
249	4. おわりに—残された問題

第 4 部 語構成と意味

257		まえがき
259	第 1 章	「広がる・広げる」と「広まる・広める」
259		1. はじめに
262		2. 「広がる, 広げる」, 「広まる, 広める」の意味の確定
269		3. 「広がる」と「広まる」, 「広げる」と「広める」の意味の関係—「広くなる」「広くする」を通して見る
273		4. 同様の形態論的構造を持つ語と「広がる, 広げる」「広まる, 広める」の意味
278		5. まとめと今後の課題
281	第 2 章	「近づく」と「近寄る」
281		1. はじめに
283		2. 「近づく」の後項「-づく」について—語基か接辞か
308		3. 「近寄る」の語構成論的構造の一特徴について
324		4. まとめと今後の課題
331		参考文献
339		あとがき
345		初出一覧

序

私の語構成論

本章では、最初に、従来の語構成論に関して、その方法上の問題や、語構成論の言語研究内における位置づけに関わる問題について概観し、その後で、筆者の語構成論に関する立場や方法について述べたいと思う。

1. 従来の語構成論

1. 1. 方法

従来、語構成論について論ずる場合、必ずと言っていいほど言及されるのが、阪倉篤義の行なった「語形成論」と「語構造論」との区別である。すなわち、

- 注1
- 語形成論→「ある事物に命名するにあたってあらたな言語記号を創造する、『造語』(word-building, word-making)の事実(中略)を、主として発生的な見地から論じようとする」
 - 語構造論→「すでに形成されて存在するある言語単位について、これが、いかなる部分要素の結合によつて構成されてゐるかといふ『語構

造』(word-formation)の事実(中略)を主として記述的な立場から明らかにせんとする」^{注2}

このうち、従来の語構成論は、『国語学大辞典』も述べるように、^{注3}語構造論の方が中心となっており、その中でも特に、

①語構成要素の性格づけ(カテゴリー化)

②実際に語を構成している要素間の関係を、意味論的、あるいは統語論的観点からタイプ化すること

の2点を実際の記述の目標として、時に統計的な観点や手法を取り入れながら行なわれて来た、と言ってよいと思われる。

しかし、野村(1989)のように、上述の二分法を厳格に適用することに疑問を呈する研究者もあり、その述べるところにはうなずける点も多い。^{注4}

ただ、いずれにしても、従来の語構成の研究を見ていると、研究の目的、視点、方法等に関して明確な主張を持つものが意外に少なく、どうしても分析結果の呈示そのものに重点が置かれるような傾向があるように筆者には感ぜられる。残念なことである。その点、野村が同論文の中で次のように述べているのは貴重である。

文法研究における構文論と平行的なあつかいをというのは、いいすぎとしても、語構成論の領域を画定し、独自の目的と方法をもつことが必要な段階にいたっているとおもわれる。(p53)

なお、蛇足ながら、語構成論には、現在筆者が直接問題にしている現代日本語を対象とするものの他にも、対照言語学的なもの、方言を対象とするもの、歴史的な研究のもの、等があり、それぞれ盛んに研究が行なわれていることを付け加えておく。

1. 2. 位置づけ

野村(1989)の中で、野村が、

日本語研究で語構成論がしめる位置はかならずしも明確ではない。これ

までの語構成研究は、文法研究の一部としてあつかわれるか、語彙研究のなかで周縁的な問題として位置づけられる傾向がつよかった(ペ53)と述べているように、従来の語構成研究においては、自らの研究を言語研究全体の中でどのように位置づけるのか、という点についてははっきりした見通しを持たないものが多かったように思う。

しかし、一方、従来のいわゆる語構成研究においては、語構成論というのは基本的には語彙論の一部である、といった共通理解が、漠然とした形ではあるが存在していたように筆者には思われる。^{注5}しかし、またそれと同時に、特に語構造論においては、語構成要素間の結合のタイプを探る際などに、文法論との関わりが深くなる^{注6}ことが指摘されていることも見逃せない。

一方、こういった論とは全く別に、語構成論を明確に、あるいは積極的に文法論の中に位置づけようとする考え方もある。そして、こういった立場を代表するのが宮地裕と森岡健二^{注7}であろう。ただ、当然のことながら、この両者の間にも、語構成論と文法論との関わりのさせ方や両論の関わり合いの度合いなどについては違いがあり、筆者の見るところでは、森岡の方が宮地より文法論との関わりが一層強いように思われる。森岡の場合は、語構成論が完全に自己の文法論の一部になっていると言えよう。

さて、宮地においてまず特徴的なことは、語構成を言語における他の様々な単位体構成の中に位置づけ、語構成を、それよりも上位の節構成、句構成、文構成に配慮しながら考えていこうとする姿勢が非常に強いことである(特に節構成との関わりが重視される)。また、宮地は、自己の語構成論を「狭義の語構成論」^{注8}(=形態論)と呼び、それと通常の語構成論との違いを次のように説明している。

- 形態論→「主として単純語が、どういうモーフによって、どのように構成されているかということを、接辞・助辞とのかかわりにおいて論ずるもの」
- 語構成論→「主として自立語つまり単純語・複合語全般が、どういう

モチーフによって、どのように構成されるかを論ずるもの」「形態論のように接辞・助辞自体をも体系のなかに取りこんで位置づけなければならないわけではない。」^{注9}

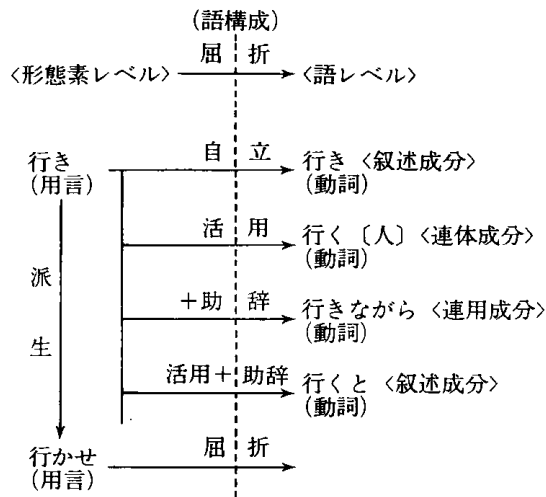
また、この両者の相違は、宮地によれば、「形態論は文法論的な見かたに重点がかかるものであり、語構成論は語彙論的な見かたに重点がかかるものだ」(べ70)とも概略言えると言う。

以上のような宮地の語構成論に関しては、筆者とは、具体的な処理の仕方や記述の枠組みなどについてかなり異なる^{注10}とはいうものの、語構成論を語構成の中だけでとらえないで、広く他の単位体構成との関わりの中でとらえていこうとする基本姿勢に対しては共感が持てる、と言えよう。

次に、森岡の論であるが、森岡の場合何より特徴的なのは、語を「文の成分の最小単位」と規定し、従ってまた、語構成を「文の成分形成法」ととらえる点である。すなわち、森岡によれば、文の成分には、「叙述成分、連用成分、連体成分、並立成分、独立成分」の五つがあり、語構成とは、語基(形態素レベル)がどのようにしてこれらの成分を形成するのかということであるという。そして、その成分形成法を語基の屈折と呼び、それには、自立(ゼロ屈折)、活用、助辞を伴う、の三種があるとする。なお、森岡においては、通常の意味における語構成というのは、接辞による語基間の派生、あるいは語基同士の複合という形でとらえられることになる。以上の森岡の考えを簡略化して図示するとすれば、次ページのように^{注11}なろう。

森岡の考えには、松下文法の影響が色濃く見られるが、筆者の立場からすると、次のような点に若干の疑問を感ずる。それは、森岡においては、たとえば「行き」(ex. 明日学校へ行き、)と「行く」(ex. 明日学校へ行く。)と「行きながら」(ex. 学校へ行きながら、)等は同一語(の異なり)と解釈されると思われるのだが、その同一性の保証が、語よりも一段レベルの低い形態素においてなされている、という点である。つまり、これらの語は、同一語基「行き」^{注12}の屈折形であるから同一語であるというわけである。もちろん、理論的には

[図1]



それでも構わないのだけれども、我々の言語意識としては、これらの同一語性を保証するのは、むしろ、これらの語よりも一段階抽象度のレベルの高い、すなわち、これら個々の語から抽象化されたものとしての語が存在すること^{注13}によってではないか、と筆者には思われるのである。

2. 筆者の語構成論——立場・方法

先に1.1.で紹介した従来の語構成論の二分法に従えば、筆者の行なっている語構成論は、基本的には語構造論の方に属すると言えよう。

確かに、野村(1989)の中で野村が力説するように、現在の語構成研究に造語論的観点が必要なことは、一般論として筆者も認める。しかし、だからと言って、

現代の造語にかかわる問題を解明し、つぎの時代への指針として呈示することこそ研究者に課せられた使命である。(p.58)

とまで言い切るつもりは、今のところ筆者には無い。先にも述べたように、語構成論は、現在のところ分析結果の呈示ばかりが先行している感があり、

それを背後で支える方法論や分析の視点等に関して、もっと様々な試みが自由に行なわれてもよい、と考えるからである。なお、野村の主張との関わりで一言付け加えるなら、最近、石井正彦が野村と共に、あるいは独自に研究を行なっている「造語モデル」という概念は、^{注14}魅力的ではあるが、現状ではまだその全貌が示されておらず、厳密な意味では、石井の言う「生成モデル」には未だ至っていないように思われる。

さて、前置きはそのくらいにして、筆者自身が、現在行なっている、あるいは目指している語構成論について、その立場や方法論上の特質と思われる点を、以下三つに分けて述べることにする。

①単語認定、すなわち、一語とは何か、という問題意識を根底に持つということ。

従来の語構成論においても、一語とは何かということが問題として提出されることは時々あったが、^{注15}それは、語構成というのが語の構成を扱う以上、語というものがどういうものであるかわからなくては分析対象が定まらないから、という、いわばかなり消極的な理由によるものであった。しかも、結果的にはこの問題に深入りするのを避け、通説に従っておくとするか、問題点を指摘するのに留まるのが一般である。^{注16}

しかし、筆者の考えでは、語構成論において一語とは何かという問題をしっかりと考えておくということは、次に述べる②との関連で非常に重要であると思うのである。また、それと同時に、それとの関わりで、語の本質についても、それなりの見通しを持つことが必要になってくるであろう。もちろん、この場合、それはあくまでも語構成という側面から見た場合の語の本質のことである。そして、この点について、筆者は今のところ、湯本昭南の言う「ひとまとまり性」や、^{注17}筆者の言う「単語化という形態論のプロセス」という概念が非常に重要であると考えている。^{注18}^{注19}

②筆者は、自らの語構成論を文法論の中に位置づけたいと考えている。野村は野村(1989)の中で、語構成論が文法論の中の一部として存在することにあ

まり肯定的な評価を与えていないようだが、筆者は、語構成論が文法論の中に組み込まれてあること自体は、別に悪いことではないと思っている。というのは、筆者の意識の根底には、それらを含めもっと大きく、語彙論といわゆる文法論とを統合したいという思いがあるからである。そして、更に言うならば、その両者のつなぎ目に語がある、という認識を、筆者はいだいているのである。もちろん、こういった考え方には反対もあろう。たとえば、前田富祺は、

私は、文法論における語の定義と語彙論における語の定義とが違っていて良いと考えている(同じ用語にそのような二面性を認めることを避けて別^{注20}の用語を用いることも可能である)。

と述べているが、これなどはその例になるであろう。

さて、それでは、筆者の場合、語構成論を具体的にどのように文法論に組み込むのか、ということであるが、もちろん、先に紹介した宮地・森岡のいずれの論とも同じではない。それは、概略次のようになる。

まず、語構成論を、英文法で言うところの「派生形態論」(derivational morphology) [「語彙的形態論」(lexical morphology) とも言う] ととらえる。英文法においては、派生形態論は、一般に「屈折形態論」(inflectional morphology)^{注21}と共に形態論を構成すると考えられている。すなわち、次の如くである。

形態論 { 屈折形態論
 派生形態論 = 語構成論

ここで、もう一方の屈折形態論とは、「屈折」、すなわち、語がどのようにして文の成分となるか、ということ扱う部門であり、結果的には、森岡の言う語構成論とほぼ重なるが、理論的には、森岡の場合の屈折が、あくまでも語基(つまり形態素)を対象としている点で異なる。

次に、派生形態論と屈折形態論との関係であるが、この点について考えるためには、この二部門だけでなく、これに更に統語論をも加えて考察する必